様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１００５

研究課題名（和文）授業記録を活用した教師の力量形成―日本の教員文化の伝統

研究課題名（英文）Teacher's professional development through writing lesson records-Tradition of teaching profession in Japan

研究代表者
吉村　敏之（YOSHIMURA, Toshiyuki）

宮城教育大学・教育学研究科高度教職実践専攻・教授

研究者番号：８０２６１６４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：授業記録の作成によって日本の教師が力量を培った事実を、実例で示した。1930年代の群馬県玉村小学校の『草原』誌と1950年代の島小学校の『島小研究報告』は、ともに、教師が学級の子どもの姿を描き、実践を省察した記録である。玉村小学校での学習指導法研究を担った斎藤喜博が、校長として11年間にわたる「島小教育」を推進した。「授業の創造」を先導した船戸咲子は、教室の記録を毎日書き続けることにより、子どもと教材をとらえる力が高まった。子ども一人ひとりが他の子とかかわりながら自分を表現できるよう、学級を学習集団として組織した。記録を書くことで、斎藤の創った授業の原理と方法が、船戸に継承され、深化した。

研究成果の概要（英文）：The lesson records made by teachers prodece excellence in Japnanese-style lesson study. Teachers in Japan get specialized skills by recording their own practice. Making lesson records helps teachers to reflect on their own actions and ideas. The reflection turns their attetntion to understanding of children and interpretation of teaching materials. The journal "Sogen", published at Tamamura elementary school(Gunma prefecture)from 1935 to 1943, shows that novice teachers developed as a professional through recording episodes of their own classroom. The lesson study at Shima elementary school from 1952 to 1963 was accelerated by keeping a record of daily practice.

研究分野：教育方法学

キーワード：授業記録　教員文化　玉村小学校　『草原』誌　島小学校　船戸咲子　斎藤喜博　表現力

１．研究開始当初の背景

教師の専門的力量形成にむけて、教育行政でも学校現場でも様々な方策が試みられてきた。より有効なものを求めて、日本の教師たちの歩みに目を向けると、日々の教室での実践を記録することによって指導力を高めた事実がある。近年「レッスン・スタディー」として注目される、日本の授業研究の強みは、教師が自身の授業を記録し、省察し、方法を改善するサイクルを継続した点にある。

本研究の学術的意義は、(1) 教育実践史、(2) 教師教育において、次のとおりである。

(1) 教育実践史―教師による研究への注目

日本の教師たちが 1930～50 年代に進めた、学習指導法研究の系譜をたどり、自身の日々の授業を記録する研究の実態と意義を明らかにする。教師による実践と研究の持続と蓄積に注目すると、これまでの通説とは異なる、歴史像が浮かび上がる。すなわち、教育政策、教育思潮、著名なリーダーの主張をとらえると、次々に現れては消える流行の繰り返しに見えるのに対し、学校での教師による授業研究の継続が効果を上げている事実にふれる。例えば、群馬県において、斎藤喜博が新任期の 1930 年代から続けた、玉村小学校での学習指導法研究は、1950 年代に島小学校の「授業の創造」を推進する力となった。戦時下でも持続された研究は、政策や社会の変動に流されず、教職の専門性が追求された証である。

(2) 教師教育―日々の実践を記録する研究

日本の教師教育において、大学の養成段階では教育実習や模擬授業が重視され、現職研修でも授業研究に力点が置かれる傾向が強まっている。授業の研究を教師の指導力向上につなげるには、授業の事実から、何をどう学ぶかを検討する必要がある。自分の授業を記録する→記録をふまえて、子どもの学習の道筋、子どもどうしの関係、子どもと教師のかかわり、教材解釈などを検討する→学校・地域の教師集団で討議する、という過程を経て、教師の力量が高まる。先人の蓄積した実績を活かして、今日の教師教育の方策を示す。

２．研究の目的

日本の教師たちの間で蓄積された、授業の記録を活用した、専門的力量形成について、その方法と意義［教育実践史と教師教育の 2 面から］を、実際の事例をふまえて、具体的に示すことが、本研究の目的である。目的の達成に向けて、次の３つの作業に取り組む。

(1) 1930 年代日本の教師が自らの授業を記録して学習指導法を創造した研究が、1950 年代の授業研究へと発展した事実を示す。

(2) 子どもの学力と教師の指導力とを実際に高めた、教室での日々の実践に根ざした研究について、意義と特質を明らかにする。

(3) 研究の過程で資料として収集した記録を、使いやすい形にし、実践上の意義も示し、学習指導力の向上など、教師教育に活用する。

３．研究の方法

教師が自身の授業を記録して力量を培う研究について、その特質と意義を明らかにするため、以下の 5 つの作業を進める。

(1) 1930 年代の『教育論叢』誌における「学級児童観察記録」研究の実態と特質を解明

教師が担任学級の子どもの事実を記録して理論を発見する事例研究において、何が問題となり、どのような対応がとられたかを検討する。さらに、教師たちの間で、どのような原理と方法が共有されたかをとらえる。

(2) 戦時下の群馬県玉村小学校『草原』誌の内容と特質を解明

玉村小学校の研究誌『草原』に掲載された、教師の記録の特質をさぐる。特に、新任教師が眼前の子どもの姿を文章に書くことのよって、どのように力量を高めたかを検討する。記録の作成によって、自分の実践をどのように省察し、指導力を高めたかを明らかにする。

(3) 1950 年代群馬県島小学校の授業研究における教師の記録の役割を解明

玉村小学校の学習指導法研究を担い、島小学校長となった斎藤喜博が、「授業の創造」にあたり授業記録をどのように用いたかを検討する。校長１年目に刊行した『島小研究報告』と、玉村小学校『草原』との類似性をさぐる。教師が自身の実践を記録することによって力量を高めた過程を詳細にとらえる。

(4) 授業記録を活用した研究による、教師の力量形成の 1960 年代以降の展開を素描

島小学校の授業研究を先導した、船戸咲子は、采女小学校、東小学校、南小学校でも、子どもの自立と協同を促す実践の創造を続けた。学校教育への管理が進む 1970～80 年代も、学級の子ども一人ひとりの内に蔵された可能性を伸ばし、子どもの成長の姿を記した文章を『子どもの海』『子どもの話』などにまとめた。

船戸をはじめとした、教室の事実を記録して子どもの学ぶ力を培った教師に光を当て、教師間のネットワークを描き出す。

(5) 授業記録の教師教育への活用

研究の過程で収集した資料について、文書記録も映像記録もデジタル化し、教師教育に活用しやすい形にする。先人の作成した授業記録は、学習指導力の向上にむけた指針として、養成教育でも現職研修でも利用する。

４．研究成果

日本の教師が、自らの実践、とりわけ日々の授業での子どもの姿を記録することによって指導力を養った事実を示した。さらに、授業記録作成は、戦時下でも持続され、今日も有効な、日本の教員文化のすぐれた伝統であることも、実際の事例から明らかにした。

(1)『教育論叢』誌上の「学級児童観察記録」の内容と特質

『教育論叢』誌に、昭和 12（1937）年 7 月号から昭和 16（1941）年 9 月号［戦時体制による終刊号］まで掲載された「学級児童観察

記録」101 点の著者と表題のリストを作った。
　さらに、頻繁に記録を発表した、本田正信（東京の小学校訓導）について、子どもと学級の見方の変化を示した。編集者の瀬川頼太郎が提唱した「集団主義教育」の影響を受け、個人の成長には学級集団の発展が不可欠であると考えるようになった。担任する子どもの問題を「関係」の中でとらえ、「関係」が豊かになる集団を組織する教育を進めた。学級の子どもどうしの「関係」を記していった。
（2）群馬県玉村小学校『草原』誌上の記録の内容と特質
　群馬県玉村小学校において、昭和 10（1935）年 8 月から昭和 18（1943）年 1 月まで、校内研究誌『草原』が全 10 号刊行された［不定期］。1950 年代に島小学校長として「授業の創造」を 11 年間にわたって推進した、斎藤喜博が中心であった。斎藤は、『教育論叢』編集者の瀬川頼太郎と交流があり、学級集団の組織、学級の観察記録など、影響を受けている。
　若い教師が、日々の子どもの姿と自らの子どもとのかかわりの様子を描いている。初任者が、眼前の子どもの事実を詳細に観察して学級集団を組織できる過程が、記録に示されている。「皇国民錬成」が目指された戦時下でも、子どもに温かいまなざしを向けて、「叱らない」教育に努めた教師たちが存在した。
　玉村小学校の教育の真理を継承できるよう、『草原』全 10 号の合本・復刻版を刊行した。『草原』は、海外（イギリス　マンチェスター大学）の日本文化研究者にも、日本の教育の質を知る資料として活用されている。
（3）群馬県島小学校の「授業の創造」における記録の意義
　玉村小学校、芝根小学校で学習指導法の研究を続けてきた、斎藤喜博が、1952（昭和 27）年に、島小学校長となる。赴任直後から取り組んだ、授業の質の改善において、教師に学級の記録をとらせ、子どもを見る目を養った。
　「授業の創造」を先導した教師、船戸咲子は、文章に書き込みまでした、斎藤から「具体的に」「明確に」記すよう指導された。1 日の仕事のまとめとして記録を書く習慣ができると、子どもの学習の様子を振り返り、翌日の授業を構想するようになった。
　斎藤校長の 1 年目が終わる 1953 年 2 月には、教師の記録を載せた『島小研究報告（1）』が出された。その後も、『未来につながる学力』『島小の授業』と、教師が実践を記して指導力を高めた姿を示す本がまとめられた。
（4）船戸咲子の学習集団の組織における記録の意義
　記録をとり続けて教育への知見を深めた、船戸は、どの子も生き生きと学べる学級集団を「授業」によって組織する実践を積み重ねた。島小学校の授業の「定石」とされた、「～式まちがい」「想像説明」は、船戸学級で生まれた。子ども一人ひとりの内に蔵された成長の芽を見つける眼力、豊かな教材解釈をふまえて質の高い追求を展開できる力など、船戸の卓越した力量による。特に、自分の意志を表現できる個人を集団の中で育てる指導に特徴がある。采女小学校、東小学校、南小学校でも、教科学習に加え、合唱、舞踊、絵画により、子ども個々の自立を促した。船戸氏から宮城教育大学に寄贈された、東小学校 2 年生の絵画作品を額装し、教師教育と授業研究の資料とした。
（5）岸智の教育実践資料の発見
　船戸が島小学校以前に教職に就いた埼玉県児玉地域の教育について調査する過程で、隣接する比企地域において、1950 年代から 70 年代に（船戸実践と同じ時期）生徒の自立と協同を支えた教師、岸智の教育資料を発見した。岸は、東松山市の中学校教員として、生活綴方教育と学級集団づくりに力を入れた。敗戦後の農村の近代化、高度経済成長による地域の変貌、受験競争の激化など、社会のもたらす問題に対し、生徒の意識を高め、学級集団の協同によって克服する力を培おうとした。岸が自身の教育実践を記録することを出発点として、生徒さらには保護者も自らの生活を文章に綴った。自分の生き方、家族のあり方、社会のあり方を問い、人生の質を高めようとする姿勢が、生徒に育まれた。岸の記録、生徒・保護者の文集をデジタル化した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 吉村　敏之、子どもを見る・子どもが見える―船戸咲子さんの事実、教育美術、査読無、第 885 号、2016、26-29
② 吉村　敏之、個が育つ学習集団の組織―船戸咲子の実践、宮城教育大学紀要、査読無、第 50 巻、2016、305-315
③ 吉村　敏之、玉村小学校『草原』誌に描かれた子ども―教師の記録した事実、宮城教育大学紀要、査読無、第 49 巻、2015、291-304
④ 本間　明信、島小学校の授業記録：「典型」ということ、宮城教育大学紀要、査読無、第 49 巻、2015、281-289
⑤ 吉村　敏之、雑誌『教育論叢』における子ども研究―教師による学級集団の観察と記録、宮城教育大学紀要、査読無、第 48 巻、2014、281-293
⑥ 本間　明信、『草原』全 10 号の発見と復刻、宮城教育大学紀要、査読無、第 48 巻、2014、271-279

〔学会発表〕（計８件）

① 吉村　敏之、実践を記録することによる教師の成長―群馬県玉村小学校『草原』誌、日本教育方法学会第 51 回大会、2015 年 10 月 10 日、岩手大学（岩手県盛岡市）

② 吉村　敏之、学びの質を考える－授業の組織〈ラウンドテーブル〉、日本教育学会第 74 回大会、2015 年 8 月 28 日、お茶の水女子大学（東京都文京区）
③ 本間　明信、学びの質を考える－授業の組織〈ラウンドテーブル〉、日本教育学会第 74 回大会、2015 年 8 月 28 日、お茶の水女子大学（東京都文京区）
④ 吉村　敏之、探求の深まる過程－体験に根ざした言葉、日本生活科・総合的学習教育学会第 24 回全国大会、2015 年 6 月 20 日、福岡大学附属若葉高等学校（福岡県福岡市）
⑤ 吉村　敏之、子どもが見える教師になる道、東北個性化教育学会学習会、2013 年 9 月 7 日、宮城教育大学（宮城県仙台市）
⑥ 吉村　敏之、群馬県玉村小学校『草原』における教室の記録、日本教育学会第 72 回大会、2013 年 8 月 29 日、一橋大学（東京都国立市）
⑦ 吉村　敏之、昭和初期の授業研究〈ラウンドテーブル〉、日本教育学会第 72 回大会、2013 年 8 月 28 日、一橋大学（東京都国立市）
⑧ 本間　明信、昭和初期の授業研究〈ラウンドテーブル〉、日本教育学会第 72 回大会、2013 年 8 月 28 日、一橋大学（東京都国立市）

〔図書〕（計２件）
① 吉村　敏之、ぎょうせい、子どもの事実から学び続ける教師－船戸咲子さんの仕事（『教師として生きるということ－子どもを育てる教師・教師を育てる学校』所収）、2014、144-164
② 本間　明信、吉村　敏之、宮城教育大学教育臨床研究センター、『合本・復刻版草原』、2015、総頁数 713

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
吉村　敏之（YOSHIMURA, Toshiyuki）
宮城教育大学・教育学研究科高度教職実践専攻・教授
研究者番号：80261642

(2)研究分担者
本田　伊克（HONDA, Yoshikatsu）
宮城教育大学・教育学研究科高度教職実践専攻・准教授
研究者番号：50610565

(3)連携研究者
本間　明信（HOMMA, Akinobu）
宮城教育大学・名誉教授
研究者番号：70106748